

問題 2

正解

5

難易度

A

【本問のポイント】

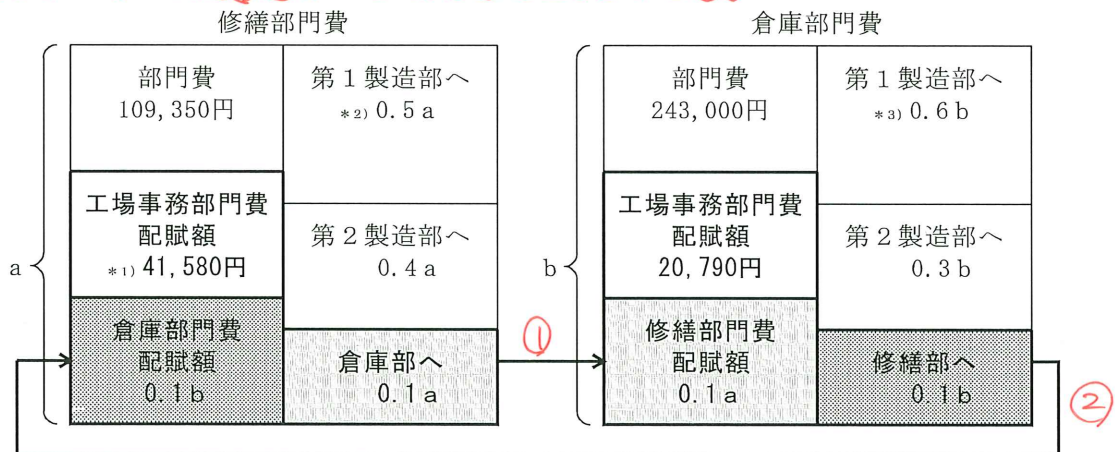
補助部門費の配賦（連立方程式法）からの出題である。基本的な問題であるため、確実に正答していただきたい。 p70

【解 説】

問題文の「補助部門間の用役の授受の流れを最も正確に計算できる方法」との指示から、相互配賦法（連立方程式法）によって計算する。また、選択肢から、第1製造部門費または第2製造部門費のどちらかが計算できれば解答を導き出せるため、効率よく解答していただきたい。

1. 相互配賦後の補助部門費

倉庫部門費および工場事務部門費配賦後の修繕部門費を a (円)，修繕部門費および工場事務部門費配賦後の倉庫部門費を b (円) とすると、以下のように表すことができる。なお、工場事務部門費は他の補助部門からの配賦がないため、先に配賦しておく。



*1) 工場事務部門費207,900円 × $\frac{\text{修繕部従業員数10人}}{\text{従業員数合計*4) 50人}}$

*2) 第1製造部修繕回数100回 ÷ 修繕回数合計*4) 200回

*3) 第1製造部材料出庫額6,000千円 ÷ 材料出庫額合計10,000千円

*4) 自家消費分は無視する。

したがって、以下のような連立方程式を立てることができる（単位：円）。

$$\begin{cases} a = 109,350 + 41,580 + 0.1b \\ b = 243,000 + 20,790 + 0.1a \end{cases}$$

上式より、a = 179,100 (円)，b = 281,700 (円) となる。

① 修繕回数200回のうち、
20回は倉庫部に向けたもの。
② 材料出庫額10,000千円
のうち、1,000千円は、
修繕部に向けたもの。

↓

$$\begin{cases} a = 109,350 + 0.1b + 0.2c \\ b = 243,000 + 0.1a + 0.1c \\ c = 207,900 \end{cases}$$

この解答速報の著作権はT A C (株)のものであり、無断転載・転用を禁じます。

2. 製造部門費の算定

(単位：円)	製 造 部 門		補 助 部 門		
	第 1 製造部	第 2 製造部	修 繕 部	倉 庫 部	工場事務部
部 門 費	860,000	780,000	109,350	243,000	207,900
修 繕 部 門 費	* 1) 89,550	71,640	(179,100)	17,910	0
倉 庫 部 門 費	* 2) 169,020	84,510	28,170	(281,700)	0
工場事務部門費	* 3) 83,160	62,370	41,580	20,790	(207,900)
製 造 部 門 費	1,201,730	998,520	0	0	0

* 1) 修繕部門費179,100円×第 1 製造部消費割合0.5

* 2) 倉庫部門費281,700円×第 1 製造部消費割合0.6

* 3) 工場事務部門費207,900円× $\frac{\text{第 1 製造部従業員数20人}}{\text{従業員数合計50人}}$

よって、正解は5である。

問題3

正解

1

難易度

B

【出題内容】

部門別個別原価計算（階梯式配賦法）

【解 説】

完成工事高を計算することができたか否かがポイントである。

1. 補助部門の順位付け

	X 補助部門	Y 補助部門	Z 補助部門
〔第1基準〕 用役提供先数	2 部門 (YおよびZへ) ↓ 同順位	2 部門 (XおよびZへ) ↓ 同順位	2 部門 (XおよびYへ) ↓ 同順位
〔第2基準〕 部門費	300千円 ↓ 2 位	500千円 ↓ 1 位	200千円 ↓ 3 位

2. 製造部門費の計算

(単位：千円)	第1部門	第2部門	Z 部門	X 部門	Y 部門
部門費	2,000	3,000	200	300	500
Y 補助部門費	*1) 150	200	50	100	500
X 補助部門費	*2) 200	150	50	400	
Z 補助部門費	*3) 225	75	300		
(計) 製造部門費	2,575	3,425			

*1) $\frac{\text{Y 補助部門費500千円}}{\text{第1部門30\% + 第2部門40\% + X部門20\% + Z部門10\%}} \times \text{第1部門30\%}$

*2) $\frac{\text{X 補助部門費400千円}}{\text{第1部門40\% + 第2部門30\% + Z部門10\%}} \times \text{第1部門40\%}$

*3) $\frac{\text{Z 補助部門費300千円}}{\text{第1部門60\% + 第2部門20\%}} \times \text{第1部門60\%}$

指図書別の

・進捗度に応じた収益を計上するには、当期に発生した原価を計算しないといけない。

・製造間接費が不明。

・部門別計算を行って、指図書別の製造間接費を計算する必要がある。

3. 製造部門費の指図書別配賦

原価計算表(製造間接費)			(単位: 千円)
製造指図書	#2001	#2002	計
第1製造部門費	*1) 1,545	1,030	2,575
第2製造部門費	*2) 1,370	2,055	3,425
合計	2,915	3,085	6,000

$$*1) \frac{\text{第1製造部門費} 2,575 \text{ 千円}}{\text{第1部門直接作業時間合計} 5,000 \text{ h}} \times \text{\#2001直接作業時間} 3,000 \text{ h}$$

$$*2) \frac{\text{第2製造部門費} 3,425 \text{ 千円}}{\text{第2部門直接作業時間合計} 10,000 \text{ h}} \times \text{\#2001直接作業時間} 4,000 \text{ h}$$

4. 当期の工事総利益の計算

損益計算書			(単位: 千円)
製造指図書	#2001	#2002	計
完成工事高	*1) 17,835	25,826	43,661
完成工事原価	△10,915	△15,085	△26,000
工事総利益	6,920	10,741	17,661

$$*1) \text{ 請負価額} 70,000 \text{ 千円} \times \frac{\text{前期繰越原価} 5,064 \text{ 千円} + \text{当期完成工事原価} *2) 10,915 \text{ 千円}}{\text{変更後見積総原価} *3) 40,000 \text{ 千円}} - \text{前期までの完成工事高} *4) 10,128 \text{ 千円}$$

$$*2) \text{ 直接材料費} 5,000 \text{ 千円} + \text{直接労務費} 3,000 \text{ 千円} + \text{製造間接費} 2,915 \text{ 千円}$$

$$*3) \text{ 当期から完成までの見積総原価} 34,936 \text{ 千円} + \text{前期繰越原価} 5,064 \text{ 千円}$$

$$*4) \text{ 請負価額} 70,000 \text{ 千円} \times \frac{\text{前期繰越原価} 5,064 \text{ 千円}}{\text{変更前見積総原価} *5) 35,000 \text{ 千円}}$$

$$*5) \text{ 当期から完成までの見積総原価} 34,936 \text{ 千円} - \text{高騰分} 5,000 \text{ 千円} + \text{前期繰越原価} 5,064 \text{ 千円}$$

以上より、正解は1となる。

当期末までの、あるべき完成工事高 - 前期末までの完成工事高

おそらく時間内に解けなかったと思われるが、部門別計算の勘定連絡が理解できる良問。
テキストを使って、十分復習してほしい。

この解答速報の著作権はTAC(株)のものであり、無断転載・転用を禁じます。

問題 3

正解

5

難易度

B

ポイント

製造部門費a/cの貸方→予定配賦額、
借方→実績という理解のもと、その中の計算は
連立方程式法を用いる必要がある。

【出題内容】

部門別計算（相互配賦法、勘定記入）

【解 説】

補助部門間の用役授受は工場事務部門から動力部門に対してのみである。よって、「相互配賦法を用いて配賦」することとされているが、階梯式配賦法（工場事務部門を先順位、動力部門を後順位）により計算すれば足りる。

P74(1) → 1. 予定操業度（年間）における製造部門費予算額

$$\begin{cases} x = 800,000 + \frac{3}{98} y \\ y = 490,000 \end{cases}$$

	第1製造部門	第2製造部門	動力部門	工場事務部門
部門費	10,115,625円	9,114,375円	800,000円	490,000円
工場事務部門費	*1) 175,000円	300,000円	15,000円	
動力部門費	*2) 509,375円	305,625円	815,000円	
製造部門費	10,800,000円	9,720,000円		
	*3) @450円	@360円		

*1) $\frac{\text{工場事務部門費} 490,000 \text{円}}{\text{従業員数} (第1製造35人 + 第2製造60人 + 動力3人)} \times \text{従業員数} 35人$

*2) $\frac{\text{工場事務部門費配賦後の動力部門費} 815,000 \text{円}}{\text{動力供給可能量} (第1製造2,400\text{kw-h} + 第2製造1,440\text{kw-h})} \times \text{動力供給可能量} 2,400\text{kw-h}$

*3) 第1製造部門費10,800,000円 ÷ 予定操業度（年間）24,000機械作業時間

P75(2)① → 2. 実際操業度における製造部門費

	第1製造部門	第2製造部門	動力部門	工場事務部門
部門費	850,054円	759,450円	69,000円	39,200円
工場事務部門費	*1) 14,000円	24,000円	1,200円	
動力部門費	*2) 38,610円	31,590円	70,200円	
製造部門費	902,664円	815,040円		

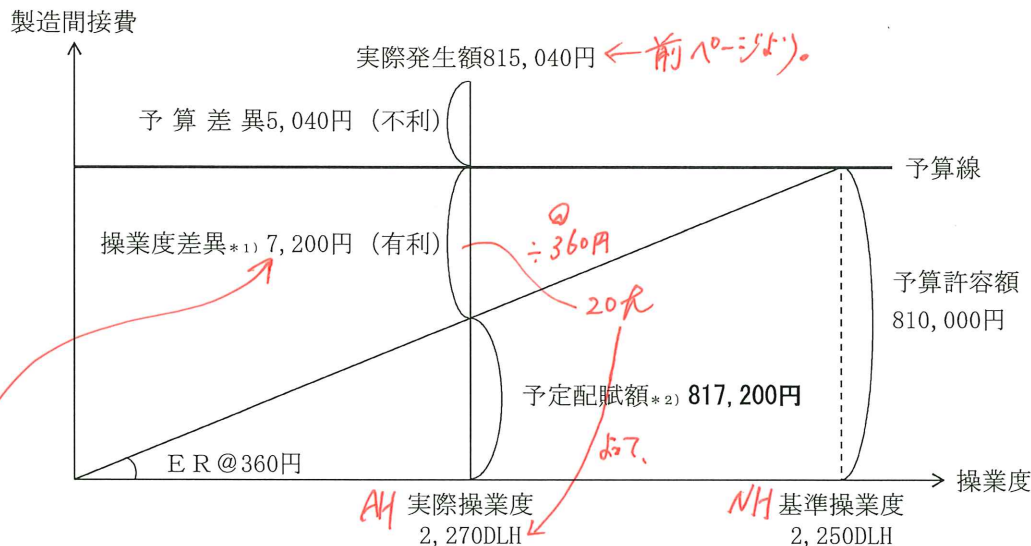
*1) $\frac{\text{工場事務部門費} 39,200 \text{円}}{\text{従業員数} (第1製造35人 + 第2製造60人 + 動力3人)} \times \text{従業員数} 35人$

*2) $\frac{\text{工場事務部門費配賦後の動力部門費} 70,200 \text{円}}{\text{実際動力消費量} (第1製造220\text{kw-h} + 第2製造180\text{kw-h})} \times \text{実際動力消費量} 220\text{kw-h}$

$$\begin{cases} x = 69,000 + \frac{3}{98} y \\ y = 39,200 \end{cases}$$

3. 予定配賦額の算定

製造間接費が固定費と変動費とに区分されていないため、固定予算を採用していると判断する。



*1) 第2製造部門費借方合計822,240円ー第2製造部門費815,040円

*2) 予算許容額810,000円+操業度差異7,200円 (有利)

なお、各勘定の金額を埋めると、以下のとおりとなる。

第1製造部門費				第2製造部門費				
実発	製造間接費	850,054	仕掛品	895,500	製造間接費	759,450	仕掛品	(817,200)
	動力部門費	(37,950)	操業度差異	4,500	動力部門費	(31,050)	予算差異	(5,040)
	工場事務部門費	(14,660)	予算差異	2,664	工場事務部門費	(24,540)		
		902,664		902,664	操業度差異	(7,200)		
					(822,240)			822,240

動力部門費 *				工場事務部門費 *			
製造間接費	69,000	第1製造部門費	(37,950)	製造間接費	39,200	第1製造部門費	(14,660)
		第2製造部門費	(31,050)			第2製造部門費	(24,540)
	69,000		69,000		39,200		39,200

注) 工場事務部門費のうち、動力部門費勘定を経由して各製造部門に配賦される金額については、動力部門費勘定への集計が省略されている。

以上より、正解は5となる。

*) 補助部門費の勘定に、配賦差異がないため、補助部門費は実際配賦されていると分かる。
(P75(2)①)

問題 4

正解

5

難易度

A

【出題内容】

計算 製造間接費の配賦計算

【解 説】

平易な問題であるため、確実に正答して欲しかった。なお、本問では「製造間接費について直接作業時間に基づく予定配賦を行っている」と指示されているが、製品1個当たり予定直接作業時間と実際直接作業時間が等しく、かつ製品1個当たり製造間接費が与えられているため、生産量を操業度として差異分析を行えばよい。

1. 予算差異の計算

実際固定製造間接費が「資料」にないため、実際固定製造間接費は予定固定製造間接費と同じ金額になると考えざるをえない。したがって、予算差異は変動製造間接費のみから計算する。

(1) 変動費予算許容額 (@予定変動製造間接費 × 実際生産量)

製品A 2,000円 × 800個 + 製品B 4,000円 × 3,600個 + 製品C 5,000円 × 1,600個 = 24,000,000円

(2) 実際変動製造間接費 (@実際変動製造間接費 × 実際生産量)

製品A 2,100円 × 800個 + 製品B 4,400円 × 3,600個 + 製品C 5,200円 × 1,600個 = 25,840,000円

(3) 予算差異

変動費予算許容額 24,000,000円 - 実際変動製造間接費 25,840,000円 = -1,840,000円 (不利)

2. 操業度差異の計算 (@予定固定製造間接費 × (実際生産量 - 予定生産量))

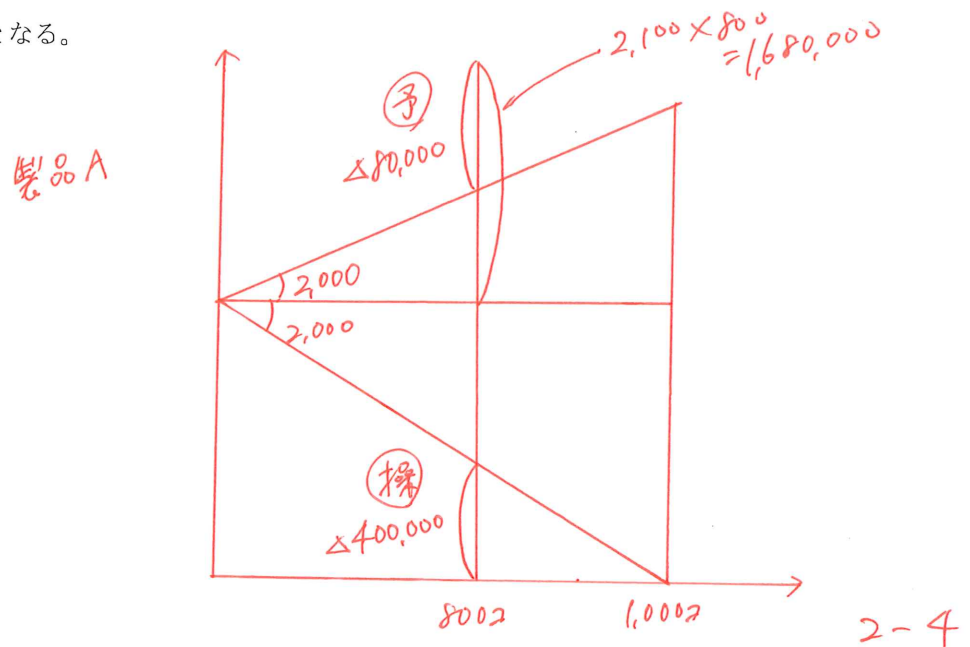
製品A 2,000円 × (800個 - 1,000個) + 製品B 1,000円 × (3,600個 - 4,000個)

+ 製品C 4,000円 × (1,600個 - 2,000個) = -2,400,000円 (不利)

3. 予算差異と操業度差異の差額

予算差異 (-1,840,000円) - 操業度差異 (-2,400,000円) = 560,000円

以上より、正解は5となる。



問題 2

正解

2

難易度

B

【出題内容】

計算 部門別計算（階梯式配賦法、複数基準配賦法、予定配賦）

p68~69, 74~75

【解 説】

計算量が多いが、何とか正答して欲しかった。

計算量が多いだけで難しくはない。

p68上表9(1)(2)(3)が同時に問われた問題。

p74~75の流れを意識して、解き直しをしてほしい。

1. 予定配賦率の計算

(1) 補助部門の順位付け

(第1基準：他の補助部門に対する用役提供先の数、第2基準：部門費の金額)

	動力	用水	工場事務
[第1基準] 用役提供先数	1 部門 (用水へ) ↓ 同順位	1 部門 (動力へ) ↓ 同順位	2 部門 (動力および用水へ) ↓ 1 位
[第2基準] 部門費	変 1,305千円 固 760千円 ↓ 2 位	変 590千円 固 350千円 ↓ 3 位	—

(2) 予定配賦率の計算 (単位：千円)

	製 造 部 門		補 助 部 門		
	第一	第二	用水 <i>3位</i>	動力 <i>2位</i>	工場事務 <i>1位</i>
部 門 費 変	14,340	7,705	590	1,305	—
固	10,920	6,950	350	760	1,000
工 場 事 務 変	—	—	—	—	—
固	*1) 400	300	100	200	1,000
動 力 変	*2) 800	405	100	1,305	
固	*3) 560	320	80	960	
用 水 変	*4) 400	290	690		
固	*5) 300	230	530		
製造部門費 変	15,540	8,400			
固	12,180	7,800			
予定配賦率 変	*6) @3.7	@2.8			
固	*7) @2.9	@2.6			

$$\begin{aligned}
 *1) & \frac{\text{工場事務固定費1,000千円}}{\text{従業員数合計(12人+9人+6人+3人)}} \times \text{第一12人} \\
 *2) & \frac{\text{動力変動費1,305千円}}{\text{予定動力消費量合計(6,400kWh+3,240kWh+800kWh)}} \times \text{第一6,400kWh} \\
 *3) & \frac{\text{動力固定費960千円}}{\text{動力消費能力合計(7,000kWh+4,000kWh+1,000kWh)}} \times \text{第一7,000kWh} \\
 *4) & \frac{\text{用水変動費690千円}}{\text{予定用水消費量(5,600kℓ+4,060kℓ)}} \times \text{第一5,600kℓ} \\
 *5) & \frac{\text{用水固定費530千円}}{\text{用水消費能力(6,000kℓ+4,600kℓ)}} \times \text{第一6,000kℓ} \\
 *6) & \frac{\text{第一変動費15,540千円}}{\text{年間の予定操業度4,200時間}} \\
 *7) & \frac{\text{第一固定費12,180千円}}{\text{年間の予定操業度4,200時間}}
 \end{aligned}$$

2. 製造部門費の差異分析

(1) 製造間接費総差異

第一：予定配賦額^{*1)} 2,112千円－実際発生額^{*2)} 2,260千円＝－148千円(不利差異)

第二：予定配賦額^{*3)} 1,242千円－実際発生額^{*4)} 1,299千円＝－57千円(不利差異)

*1) 予定配賦率@6.6千円(変@3.7千円+固@2.9千円)×実際操業度320時間

*2) 変1,172千円+固1,088千円

*3) 予定配賦率@5.4千円(変@2.8千円+固@2.6千円)×実際操業度230時間

*4) 変655千円+固644千円

(2) 変動費予算差異

第一：予算許容額^{*1)} 1,184千円－実際発生額1,172千円＝12千円(有利差異)

第二：予算許容額^{*2)} 644千円－実際発生額655千円＝－11千円(不利差異)

*1) 変動費率@3.7千円×実際操業度320時間

*2) 変動費率@2.8千円×実際操業度230時間

変動費予算差異の合計：(12千円)+(－11千円)＝1千円(有利差異)

(3) 固定費予算差異

第一：予算額^{*1)} 1,015千円－実際発生額1,088千円＝－73千円(不利差異)

第二：予算額^{*2)} 650千円－実際発生額644千円＝6千円(有利差異)

*1) 固予算額12,180千円÷12ヶ月

*2) 固予算額7,800千円÷12ヶ月

固定費予算差異の合計：(－73千円)+(6千円)＝－67千円(不利差異)

(4) 操業度差異

第一：固定費率@2.9千円×(実際操業度320時間－予定操業度^{*1)}350時間)
＝－87千円(不利差異)

第二：固定費率@2.6千円×(実際操業度230時間－予定操業度^{*2)}250時間)
＝－52千円(不利差異)

^{*1)} 年間の予定操業度4,200時間÷12ヶ月

^{*2)} 年間の予定操業度3,000時間÷12ヶ月

操業度差異の合計：(－87千円)＋(－52千円)＝－139千円(不利)

3. 各記述の検討

1. 誤り。 第一製造部と第二製造部の製造間接費の変動費予算差異の合計は1,000円(有利差異)である。
2. 正しい。
3. 誤り。 第一製造部門と第二製造部門の製造間接費の操業度差異の合計は139,000円(不利差異)である。
4. 誤り。 第一製造部門の製造間接費総差異は148,000円(不利差異)である。
5. 誤り。 第二製造部門の製造間接費総差異は57,000円(不利差異)である。

以上より、正解は2となる。

問題 2

正解

3

難易度

A

【出題内容】

計算 部門別計算（製造部門費の予定配賦） *P74~75*

【解説】

計算量は若干多いが、基本的な内容であるため、確実に正答して欲しかった。

P74 → 1. 製造部門費予算と予定配賦率

	切削部		組立部	
	変動費	固定費	変動費	固定費
部門費	*1) 2,895,000円	3,000,000円	3,315,000円	2,550,000円
動力部費	*2) 2,040,000	*4) 1,836,000	1,428,000	1,377,000
	4,935,000円	4,836,000円	4,743,000円	3,927,000円
	*3) 3,290円/時間	3,224円/時間	2,790円/時間	2,310円/時間
予定配賦率	6,514円/時間		5,100円/時間	

- *1) 変動費率1,930円/時×予定直接作業時間1,500時間
 *2) 動力部変動費予定配賦率2,040円/kWh×予定動力用役消費量1,000kWh
 *3) 変動費予算4,935,000円÷予定直接作業時間1,500時間
 *4) 動力部固定費3,213,000円×

$$\frac{\text{動力用役消費能力1,200kWh}}{\text{切削1,200kWh} + \text{組立900kWh}}$$

P75 → 2. 製造部門費実際発生額 *借方金額の計算 (複数+予定)*

(2)②

	切削部		組立部	
	変動費	固定費	変動費	固定費
部門費	2,716,000円	3,000,000円	3,152,000円	2,550,000円
動力部費	*1) 1,958,400	1,836,000	1,448,400	1,377,000
	4,674,400円	4,836,000円	4,600,400円	3,927,000円
製造部門費	9,510,400円		8,527,400円	

- *1) 動力部変動費予定配賦率2,040円/kWh×実際動力用役消費量960kWh

P75 → 3. 各部門の配賦差異

(2)②

切削部：予定配賦率6,514円/時間×実際直接作業時間1,400時間

— 実際発生額9,510,400円 = -390,800円 (不利差異)

組立部：予定配賦率5,100円/時間×実際直接作業時間1,600時間

— 実際発生額8,527,400円 = -367,400円 (不利差異)

動力部：{変動費予定配賦率2,040円/kWh×実際動力用役消費量(960kWh+710kWh)

+ 固定費予算3,213,000円} - 実際発生額6,513,000円 = 106,800円 (有利差異)

問題 4

正解

2

難易度

B

【出題内容】

計算 部門別計算（簡便な相互配賦法），個別原価計算

【解 説】

落ち着いて状況を整理し，何とか正答して欲しかった。

まず方針を考える

加工費の金額を算定しないと。

答えがでない。

本問では、製造間接費、つまり、製造部門費。

1. 機械加工部門費および組立加工部門費 p70

(単位：円)

費目	製造部門		補助部門		
	機械加工 部門	組立加工 部門	動力部門	修繕部門	工場事務 部門
部門費	1,000,125	875,000	225,000	150,000	75,000
第1次配賦					
動力部門費	108,000	*1) 72,000	—	33,750	11,250
修繕部門費	70,000	50,000	15,000	—	15,000
工場事務部門費	36,000	24,000	11,250	3,750	—
第2次配賦			26,250	37,500	26,250
動力部門費	*2) 15,750	10,500			
修繕部門費	21,875	15,625			
工場事務部門費	15,750	10,500			
合計	1,267,500	1,057,625			

動力部門費225,000円

*1) $\frac{\text{動力部門費第1次配賦額26,250円}}{\text{機械3,840馬力} + \text{組立2,560馬力} + \text{修繕1,200馬力} + \text{工場400馬力}} \times \text{組立2,560馬力}$

*2) $\frac{\text{動力部門費第1次配賦額26,250円}}{\text{機械3,840馬力} + \text{組立2,560馬力}} \times \text{機械3,840馬力}$

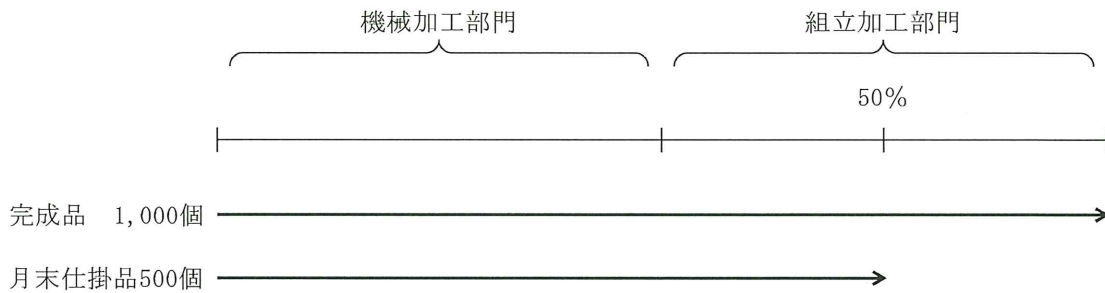
または、動力部門費第1次配賦額26,250円－組立10,500円

ここまでは簡単。

2. 当月完成品原価に含まれる機械加工部門費および組立加工部門費

(1) 状況の整理

〔資料〕3. (注)で、月末仕掛品について「機械加工が終了後、組立加工が行われる。(機械加工部門費進捗度100%, 組立加工部門費進捗度50%)」とあるため、#101の当月生産状況は以下のように示すことができる。

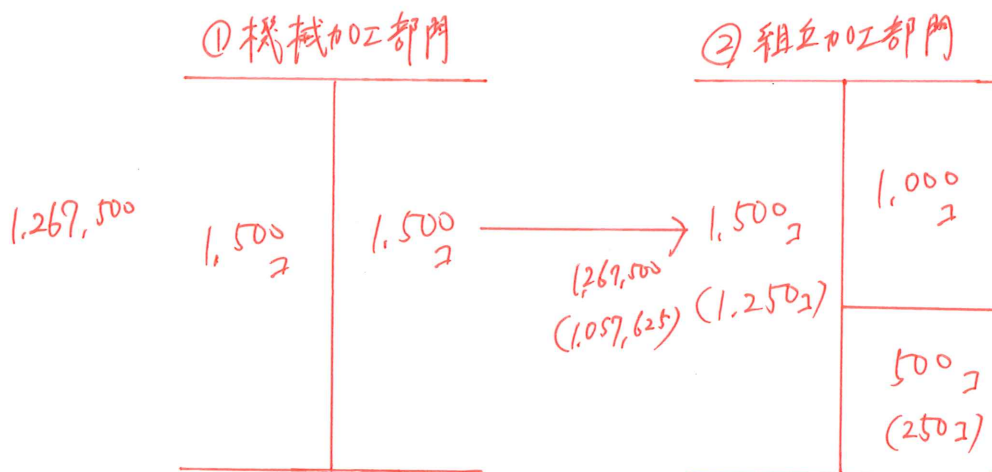


(2) 当月完成品原価に含まれる機械加工部門費および組立加工部門費

機械加工部門費				組立加工部門費			
当月	1,500個	完成	1,000個	当月	1,250個	完成	1,000個
			845,000円				846,100円
	1,267,500円	月末	*1) 500個		1,057,625円	月末	*2) 250個
	(@845円)				(@846.1円)		

*1) 月末仕掛品500個×機械加工部門費進捗度100%

*2) 月末仕掛品500個×組立加工部門費進捗度50%



問題 3

正解

6

難易度

B

【出題内容】

理論（正誤） 製造間接費の配賦計算

【解 説】

一部細かい記述もあるが、何とか正答して欲しかった。

ア. 誤

固定費は、設備計画や生産能力の変更等を考慮し、変動費は、製造条件の変更等を考慮して、これを修正する。（基準33(4)）

イ. 誤

予定配賦率の計算において基準となる操業度には、技術的に達成可能な理論的生産能力は含まれない。（基準33(5)） p50

ウ. 正

（基準41(3)2①） p58

エ. 正

（基準41(3)） p54~56

以上より、正しい記述はウ、エであり、正解は6となる。

問題 4

正解

4

難易度

B

【出題内容】

計算 部門別計算（補助部門費の配賦）

p68~70

【解 説】

計算量はやや多いものの、何とか正答して欲しかった。

難しくはない。

1. 階梯式配賦法

(1) 補助部門の順位付け

	動力部門	用水部門	工場事務部門
〔第1基準〕 用役提供先数	1 部門 (用水へ) ↓ 同順位	1 部門 (動力へ) ↓ 同順位	2 部門 (動力, 用水へ) ↓ 1 位
〔第2基準〕 部門費	90,000千円 ↓ 2 位	56,000千円 ↓ 3 位	

(2) 配賦計算（第2製造部門は省略している。）

(単位：千円)	第1製造部門	用水部門	動力部門	工場事務部門
部 門 費	140,700	56,000	90,000	36,000
工場事務部門費	*1) 17,000	2,000	6,000	36,000
動 力 部 門 費	*2) 34,560	19,200	96,000	
用 水 部 門 費	*3) 43,425	77,200		
合 計	235,685			

$$*1) \frac{\text{工場事務部門費} 36,000 \text{ 千円}}{85 \text{ 人} + 55 \text{ 人} + 10 \text{ 人} + 30 \text{ 人}} \times \text{第1製造部門} 85 \text{ 人}$$

$$*2) \frac{\text{動力部門費} 96,000 \text{ 千円}}{900,000 \text{ kWh} + 1,100,000 \text{ kWh} + 500,000 \text{ kWh}} \times \text{第1製造部門} 900,000 \text{ kWh}$$

$$*3) \frac{\text{用水部門費} 77,200 \text{ 千円}}{900 \text{ 千 m}^3 + 700 \text{ 千 m}^3} \times \text{第1製造部門} 900 \text{ 千 m}^3$$

2. 連立方程式法

補助部門費を相互に配賦した後の動力部門費をD(千円)、用水部門費をY(千円)、工場事務部門費をK(千円)とすると、D、Y、Kはそれぞれ下式のように示される。なお、Yは〔資料〕3.

(1)より、81,060千円と判明している。

$$D = 90,000 + (500/2,100)Y + (30/180)K$$

$$Y = 81,060$$

$$K = 36,000$$

したがって、動力部門費は115,300千円、用水部門費は81,060千円、工場事務部門費は36,000千円となる。

以上の計算結果をもとに補助部門費配賦表を作成すると、以下のようになる(第2製造部門は省略している)。

(単位：千円)	第1製造部門	動力部門	用水部門	工場事務部門
部 門 費	140,700	90,000	56,000	36,000
動 力 部 門 費	*1) 41,508	(115,300)	23,060	—
用 水 部 門 費	*2) 34,740	19,300	(81,060)	—
工場事務部門費	*3) 17,000	6,000	2,000	(36,000)
合 計	233,948	0	0	0

$$*1) \frac{\text{動力部門費115,300千円}}{900,000\text{kWh} + 1,100,000\text{kWh} + 500,000\text{kWh}} \times \text{第1製造部門900,000kWh}$$

$$*2) \frac{\text{用水部門費81,060千円}}{900\text{千m}^3 + 700\text{千m}^3 + 500\text{千m}^3} \times \text{第1製造部門900千m}^3$$

$$*3) \frac{\text{工場事務部門費36,000千円}}{85\text{人} + 55\text{人} + 30\text{人} + 10\text{人}} \times \text{第1製造部門85人}$$

3. 第1製造部門費の差額

階梯式配賦法235,685千円－連立方程式法233,948千円＝1,737千円

問題 3

正解

5

難易度

A

【出題内容】

理論（正誤） 製造間接費の配賦計算

【解 説】

平易な問題であるため、確実に正答して欲しかった。

ア. 誤

製造間接費の製品別配賦基準の選択は、通常、価値移転の観点から行われる。また、直接材料費基準は、価値移転を重視した製造間接費の配賦基準とはいえない。 p384

イ. 正 p47

ウ. 誤

計算の経済性を満たすためには、原価部門の数はより少ないほうが望ましい。 p64

エ. 正 p71

以上より、正しいものはイエであることから、正解は5となる。

問題 3

正解

3

難易度

B

【出題内容】

理論（正誤） 製造間接費の配賦計算，部門別計算

【解 説】

判断に悩む記述もあるが，何とか正答して欲しかった。

ア．正

(基準8(3)) p12

イ．誤

部門をコスト・プールとして用いたとしても，正確な配賦計算を行うことができることもあ
る。 p315 上表 「製品単位レベル」の活動が多い工場なら、正確な配賦計算
であるといえる。

ウ．誤

我が国の「原価計算基準」では因果基準に基づく配賦基準に限定されていない。

(基準33(5))

p384 連産品⇒負担能力基準

エ．正

(基準18(1)) p62

以上より，正しい記述は，ア，エであり，正解は3となる。